

魔界の門

譚遺拾 魔界の門

如

月

つ

ば

き



セリル＝エルトンと眠りの書「ザイスの王女」

深海のオリ

La Fino de la Gusto 一味覚の終焉ー

セリル＝エルトンと眠りの書 「ザイスの王女」

セリル＝エルトンは書いていた日誌に最後の句点をつけ、満足そうに頷いてから日誌を閉じた。退屈な一日の終わりを締めくくるこの時間は、彼の唯一無二の楽しみである。

セリルはいつものようにナイトキャップを被り、ベッドに潜り込んだ。日誌には彼が幼い頃から見夢で見た世界が記録されている。彼は今夜もまた夢の世界を旅しに行く。

セリルは祖父から聞いた内容を回想した。かつてキングズポートの灯台守であったエルトン家は、夢を自由に旅し、夢の世界にその名を刻んだ。エルトン家の遠い親戚であるセリルもまた運良く夢の世界を旅する能力に恵まれた。

——人に話せば笑われることでも、夢の世界では望めばなんでも叶う。ただし、悪行を働けば、現実の世界よりも恐ろしい罰が下されるだろう。

祖父の金言をセリルはじっくりと反芻する。これも夢の世界に旅立つ前の彼のルーティンであった。彼は深く一息つくと、夢の世界に落ちていった。

気が付くとセリルは懐かしい気持ちを抱かせる村の中にいた。人気のないその村には一本の道が通っており、彼は村にはわき目も振らず、いつものように道を進んだ。道の先には崖があり、はるかな深淵を湛えている。セリルは躊躇せず、崖から身を投げた。

深淵は瑠璃色の瞬きを見せながら、彼を下へ下へと運んでいった。闇の中には奇怪な翅の生えた不気味な生き物や、歯を剥きだして噛みつくこうとする顔だけの怪物の姿があったが、セリルはじっと自由落下に身を任せていた。

次第に彼の下に、まばゆいばかりの光の亀裂が現れた。彼はうっとりとそれを眺めた。光の亀裂からは、夢の世界のあらゆる美しい光景が垣間見えるのである。彼は身を翻し、亀裂に滑り込んだ。夢の世界は彼を受け入れ、亀裂を閉じた。セリルは落下しながら素早く眼下を見下ろし、自分がどこに落とされるのか確認した。彼はいつも崖を落下して夢の世界に入るのだが、この方法は、気まぐれな夢の性格を如実に表しており、どこに落とされるかは見当がつかないのだ。

見渡すと眼下は一面の草原で、彼はふわりと着地した。海が近いのか潮風がほのかに香り、近くに都市が見える以外はなんの変哲もない草原であった。

都市はまばゆいばかりの白さに包まれており、まるで発光しているかのような美しさは遠目にでも判別がついた。雪花石膏とダイヤモンドの輝きに彩られた夕暮れの町の名はザイス。道の代わりに澄んだ小川が流れ、永遠の日暮れ時につつまれ、優美な水音が日々奏でられる幻想的な美しさはまさに夢のようで、覚醒世界のいかなる壮麗な宮殿もこの美しさには敵わない。

だが、伝え聞くザイスは今は煙が立ち昇り、空は燃えるような橙色に染まり、人々の叫び声が響いていた。

セリルは海に接する町の入口に、黒いガレー船が泊っているのを遠目に見つめた。夢の世界で黒いガレー船にまつわる恐ろしい話は多く耳にする。黒いガレー船はレンの男たちを奴隷に引き連れる、ムーンビーストの船なのだ。彼らは月の裏側の忌まわしい怪物、見るも憚ましいヒキガエルのような残虐な生き物で邪悪な神に仕えている。

彼らに捕まれば、人間だろうと半人間だろうと奴隷にされ、太いものは食料へ、細いものは残虐な拷問を受け、健康なものは労働力として鞭打たれる事になる。そしていつか、彼らの仕える邪悪で憚ましい神々の賛にされるのだ。

セリルは勇敢で、経験豊富な夢見る人であり、数多の夢の世界の呪文を知っていたが、この時はばかりは首を振ってザイスの民たちを憐れむと、己の命を優先して背を向けた。

ザイスの南、黒いガレー船の手が及んでいないであろう別の町、ステテロスに向かうとした時であった。草を踏む足音がして、セリルは足を止めた。

息を切らした裸足の少女が、セリルへ向けて一直線に走ってきた。薄衣に身を包んだ少女は雪の花のように儂く、永遠の美しさを持っていた。夜を溶かした絹のような黒髪と琥珀を思わせる金の瞳、淡く輝く白い肌から、セリルは彼女こそがザイスの王女、夢の都の雪花と言われるナシカーナだと確信した。

ナシカーナはセリルの服をしっかりと掴むと、息を切らしながらも切羽詰まったように話しかけた。

彼女によれば、不浄なるムーンビーストが襲来し、ナシカーナを邪神の賛として差し出すように要求したという。町の人々は敬愛する王と王女の為、その話を断ると、ムーンビーストたちは残虐にも町を破壊し、人々を蹂躪し始めたのだ。

ナシカーナは唯一交流がある隣の町のステテロスの領主に助けを求める為、着の身着のまま走り、その途中で空から降りてきたセリルを見つけたのであった。ナシカーナは空からくる夢見る人の伝説を聞いたことがあり、夢見る人は偉大だと知っていたのである。

セリルは彼女の瞳に恐怖ではなく決意の光がともっているのを見た。経験豊富な夢見る人として、彼女とザイスを助けてやりたい気持ちがあった。ステテロスに行くならば道案内をしようとセリルは申し出た。

おおよその方向しか知らなかった王女は安心したように微笑み、二人は急いでステテロスへ向かった。

ステテロスは雨の都である。ともすれば美しさを感じるが、実際ははじめじめとしていて、町は水たまりに覆われ、茸や雨を好む植物が生えている陰鬱な町であった。

特徴と言えば雨を降らしている紫色の雲が永遠に晴れない事と、村人たちが親切で素朴な事である。

ステテロスに辿り着くと、村人たちはほとんどが家に引きこもっていた。外にいて労働をしている村人も、二人を避けるように遠巻きに見るばかりであった。彼らは、ザイスの恐ろしい叫びを聞き、飛び火することを畏れているのだ。

セリルとナシカーナは村人を安心させるように微笑みかけ、誰と話すこともなくまっすぐに領主、アッシュ・ロダンの下へ向かった。アッシュ・ロダンはいつも物思いに耽っているが、彼が頭の中でどんな事を考えているのか誰にも話さないため、村人たちは風変わりな人物だと思っている。しかし、彼は謹厳実直で知恵があり、ステテロスを良く治めているため、村人たちからは敬愛されている。

領主の館の戸を叩くとアッシュは重々しく扉を開き、二人を中へ招いた。アッシュは来訪者の目的をすぐに察し、セリルとナシカーナをテーブルにつかせると、すぐに話し始めた。

アッシュはムーンビーストに勝る戦力をステテロスの村から出すことは不可能であり、この村に被害が及ぶ可能性があるため、ナシカーナを匿う事も出来ないと言い渡した。

ザイスの人々や父王を助けたかったナシカーナは、匿われるつもりがないと告げ、また彼らを助ける術がないことを悔しく思い目を伏せた。

セリルはアッシュの部屋の数多の蔵書に目を奪われていた。物思いに耽りがちなこの領主が、頭の中で何を考えているか、彼にはすぐにわかった。セリルは椅子から立ち上がると、本棚に近づき、一冊の分厚い本を手にとった。そして、自分が経験豊富な夢見る人であることをアッシュに告げ、彼の知識でザイスを手助けできないかと問うた。

ナシカーナは困惑したようにセリルとアッシュを交互に見やり、アッシュは目を伏せ、押し黙って思案した。沈黙が部屋を支配し、セリルは雨の降る音が強くなったのを感じた。しばらくして、アッシュは重い腰をあげた。

アッシュはセリルの持っていた本を取り上げ、丁寧に元の場所に返し、別の棚から本を二冊抜き出した。アッシュは本を机に置き、それぞれのページを繰った。開いたページを指し示し、アッシュはムーンビーストをザイスから退かせる方法と、ナシカーナを救う為の方法を提示した。

ムーンビーストをザイスから退かせるためには、ザイスの中央にある雪花石膏の台座に旧き印を刻み、守護の呪文を唱える必要がある。呪文の効力は一時的だが、ザイスの街を旧き神の守護で包むことができる。そうすることで、邪悪な神の奉仕種族であるムーンビーストは守護の陣の中にいることが出来なくなり退散するのである。

しかし、守護の呪文の効力が切れれば、再びナシカーナを手に入れようとザイスを襲う可能性がある。それを防ぐためには、邪悪な神に捧げられる贄にふさわしいと彼らが考えた、ナシカーナ王女の美しさを削がなくてはならない。邪悪な神が醜いと感じるよう、王女は体に旧き印を刻み込まなければならないのだ。

ナシカーナは驚き、痛みを思って顔を顰めたが、すぐに頷いた。彼女にとっては彼女の美しさを維持する事より、ザイスの町やそこに住む人々の方がはるかに大切だった。彼女は己の美しさを捨てることを選び、アッシュに旧き印を刻むよう促した。

アッシュは本の一冊を片手に持つと、彼女の背に回り、輝くばかりの美しい肌に手を置いた。アッシュが旧き神々を称える呪文を唱えながら、彼女の背に指を滑らせると、ナシカーナは苦悶の呻きを漏らした。

アッシュの唄が終わると、ナシカーナの肌は輝きを失い、その背には醜くも荘厳な旧き神々の名を秘めた印が焼き付いていた。

セリルはナシカーナを見やったが、彼女の瞳は変わることなく、故郷を守るための決意の光に溢れていた。

アッシュは手に持っていた本を棚に戻し、セリルにもう一冊の本を読むよう告げた。

セリルは焼けた銀のようなインクで書かれたその文章を指でなぞった。冷たい紙の表面が波打ち、文字がページの中で揺らぎ、セリルはそれが人の手によるものではない蔵書だと気が付いた。彼の頭の中には奇妙でざらついた声が響き渡り、目が回るような感覚の中で、彼は呪文を手に入れたことを理解した。

気が付くとセリルは床に這いつくばっており、心配そうに声をかけるナシカーナをアッシュがおしとどめていた。セリルは頭を数回振って立ち上がった。

アッシュは二人をステテロスの町の端まで案内すると、急いでザイスに戻るよう促した。

来た時よりも早く、二人は草原を駆け抜けると、彼らはザイスへ辿り着いた。町は

未だ炎に包まれていたが、父王と町の人々の抵抗もあり、ムーンビーストたちの侵略はまだ思うように進んでいないようだった。

町の中央に辿り着くと、セリルは雪花石膏の台座をアッシュから借りた青銅の彫刻刀で削り、旧き印を刻み込んだ。

ナシカーナは台座に登ると、衣服を取り去り、未だ破壊と暴力をまき散らすムーンビーストたちに背を向け、己の価値を証明した。彼女の体に刻まれた旧き印はムーンビースト達が彼女に触れることを許さず、もはや供物としての価値がないことを彼らに知らしめたのだった。彼らが忌まわしい叫び声をあげ、動揺しているのをセリルは見逃さなかった。

セリルは頭の中に響き続ける言葉に身を任せると、彼の口は意識とは無関係に動き始め、旧き神々の言語が漏れ出した。台座の印とナシカーナの背中から青い光が漏れ出し、紐解かれ、空中に守護の光輪が描かれていく。光輪の端から流れる波のように広がる光が、霧のようになって町全体に広がっていった。

光の霧に触れたムーンビーストたちは武器を放り出し、一目散に黒いグレー船に乗り込んだ。船が帆先を空に向け、月へ帰っていくと、町には静寂が訪れた。

ザイスの町の小川が穏やかな音色を立てて流れ始める。同時に、町の人々が恐る恐る城から出てきた。彼らは父王の計らいで、一人残らず城壁の中に逃げ込んでいたのである。

人々は美しさを失ったナシカーナを見て涙を流したが、町を救った二人を称賛した。

父王は感謝を述べて二人を労うと、ゆっくりと一晩休むよう告げた。

次の日、夕霧に包まれるザイスの町で、セリルとナシカーナは別れの挨拶をしていた。経験豊富な夢見る人であるセリルには、そろそろ夢が終わりに近づいていることがわかっていた。

白い外套を羽織ったナシカーナは名残惜しそうにセリルを見やり、また会えるかと尋ねた。セリルは少し思案し、首を振った。その答えは、彼にはわからなかった。偉大な夢見る人、ランドルフ・カーターやクラネス王でも答えはわかりはしないだろう。セリルは傷を負い、痛みを背負いながらもなお気高く美しいナシカーナを見た。

遠くで鐘の音が聞こえ、彼は目覚めの時が来たのだと悟った。セリルは目を細め、町を眺めるナシカーナ王女を見た。周囲の景色が滲み、地面が揺らぐ。足元から支

えが消え、彼は暗闇に落ちていった。

目を開けると、彼は自室のベッドの上にいる。ナイトキャップは外れ、布団は乱れている。いつもどおりの寝相だ。

起き上がってベッドメイクを済ますと、朝食を食べながら昨夜書いた日誌を眺めた。今日もまた、現実の一日を過ごしたら今回の夢の冒険について日誌を書き、また夢を見る。遠くで時計塔の鐘が鳴るのを聞きながら彼は日誌を閉じた。

シャクラが気が付くと、世界は薄緑色だった。氷を通して水を見るような不思議な色の世界で、揺らめく柔らかな霧が、シルクのように漂っている。ぼんやりした意識で持ち上げようとした腕はほとんど動かず、指がかすかに反応しただけだった。ふと見た体は半透明で、一糸まとわぬ姿をしていた。羊水に沈む胎児のような安らぎに、これが死ならなんと穏やかだろう、と思った。

「ねえ、大丈夫？」

霧を揺らめかせて、軽やかに愛らしい声が聞こえた。声のする方を向くと、シャクラの体と同じ、半透明で透けた体をした小柄な少女が、シャクラを覗き込んでいた。少女の長い髪が霧にまぎれて揺れ、その輪郭の中で、彼女の瞳だけが輝いている。

「大丈夫そう？それなら私についてきて」

重たい空気を器用に掻き分け、少女はシャクラの手を引いて導いた。未だ自由にならない体は、少女に引かれるまま薄緑色の世界を下へ下へと滑るように進んでいく。次第に霧が薄れ、薄緑色から藍色へと世界の色が変化した。

白垂の大地と碧藍の曲線、純白にそそり立つ壁にぽっかりと空いた巨大な洞窟。

———アルティア洞窟

いまだ人類の知らない、未踏の洞窟。しかし、シャクラはその名前を知っていた。アルティア洞窟を発見したのはシャクラ自身だった。

少女は洞窟内の入り口へ滑り込み、白い霧に阻まれた洞窟の奥で立ち止まった。

「今の私たちにはここまでしか進めない。この先に何かがあるのだけど、私ではダメなの。あなた、なにか思い出せる？」

シャクラには分かった。少女の言う通り、確かにこの洞窟の先だった。この先に行かねばならないと、シャクラの魂が囁いている。シャクラは先に進もうと、何度も洞窟の出入りを繰り返し、変わらない道と見えない壁を意に介さず進むことを試みた。

そうするうち、シャクラは探検家だった自分を思い出した。仲間たちと、人類未踏の未知を求めて、道なき道を開拓し、どんな困難も乗り越えてきた。

「GOGOGOGO！」

仲間たちの、自分の、期待に溢れた明るい掛け声。力強い瞳の数々。新たな地図を書き、重い荷を背負い、未知へ挑む日々。

異様でグロテスクで、見たくも思い出したくもない記憶もあった。

ライオンのような異形の怪物が、千切れたシャクラの頭を咥えて歩いていた。怪物の口から落ちたシャクラの目が、シャクラを見る。

シャクラは思い出すと同時に反射的に目を閉じた。

シャクラが記憶を思い出すにつれて、洞窟の先の道を阻む白い霧が、綿菓子のように揺らめき、解け、消えていった。

徐々に狭くなっていく洞窟の先へ、進むのを拒みたいシャクラの意志とは関係なく、半透明の体は洞窟の奥へ奥へと引っ張られるように進んでいく。

「お願い、起きて…。一人にしないで…」

長い髪をした少女の嗚咽がシャクラの耳に届いた。温かい雫が頬に落ち、背中にはごつごつした冷たい感触が当たった。

シャクラは弾かれたように勢いよく体を起こした。

氷壁に囲まれた広い洞窟の中に倒れていたシャクラは、そばで泣いている髪の長い少女がいるのが分かった。少女はシャクラが起き上がったのをみると安心したように涙を拭って微笑んだ。そして慌てたようにシャクラの背後に走っていく。

彼女のしゃがみ込んだ場所では、仲間たちが倒れていた。少女は一人ひとり、必死に揺すり起こしていく。シャクラは口の中を嚙んだのか、口腔内に溜まった血を吐き捨てると、めまいを覚えながら仲間の元へ向かった。

仲間たちは、それぞれ血を吐いたり、嘔吐したりしていたが、全員呼吸をしており、命に別条はないようだった。

シャクラが改めて周囲を見回すと、洞窟の中央には奇妙な祭壇があった。ここが邪悪な神の神域なのだとどこかで理解した。

「生き残りたくば勇気を示せ」

シャクラの頭の中で粘つくような吐息と共に身を震わすような声が響いた。シャクラは無意識に祭壇を見上げた。そこには異形の神の偶像が置かれていた。タコのような瞳の複眼に女性を思わせる体のフォルム、凶悪なかき爪としなやかな触手を持ち、背にある未熟な翅はともすれば幼さもを感じさせた。

シャクラは一刻も早く祭壇から離れたかった。醜悪な偶像から目を逸らすと、少女と共に仲間たちを起こしにかかった。

研究者のサンドリナ、航海士のエドム、老齡なベテラン探検家のリカルト、チームで最も若い傭兵のファウセロ。

誰も着こんでいた装備はぼろぼろであったが、しばらくすると全員意識を取り戻した。皆がチームの無事を喜びながらも、怪訝そうな顔をしてシャクラに問いかけた。

「君は捧げものをしたのか？」

シャクラは頷いて、全員を集めると、一人ずつ話すよう促した。

サンドリナは仲間が全員死んだ夢を見たと言った。彼女は他者の痛みを引き受ける思いを捧げたのだ。

エドムは未知を前に理性が崩壊する自分を見たと言った。彼は自身の限界を捧げたのだ。

リカルトは直観に従い、引退する夢を見たと言った。彼は自身の知識の全てを捧げたのだ。

ファウセロは怪物の群れに囲まれ、仲間から見捨てられる夢を見たと言った。彼は命をかけても誰かを守る覚悟を捧げたのだ。

シャクラは己が死ぬ夢を見たと言った、彼は恐怖に打ち勝つ心を捧げたのだ。

彼らはそれぞれ捧げものと引き換えに、神からの恩寵、又は祝福として不思議な物を持っていた。

サンドリナは他者の傷を癒す包帯、エドムは精神を護る眼鏡、リカルトは迷宮の出口を指し示す羅針盤、ファウセロは絶対絶命を覆す剣、そしてシャクラは恐怖を祓う指輪を装備した。

誰から言うでもなく、全員の視線が少女に集まった。

少女は自身に向けられる視線に懐疑の念がこもっていることに気が付いたのか、慌てたように話した。

「私…私もこの洞窟で目を覚ましたのだけど、何も覚えてないの」

少女の様子に虚飾も欺瞞も無いと、シャクラは確信したが、なにか隠しているような困惑と悲哀の感情があるように思えた。シャクラは薄着の少女に自身の上着を渡して、他に覚えていることが無いが聞いた。

「私もここから出たいの…」

少女はシャクラの目を見てそう言った。シャクラは少女を信じることに決めると、チームはすぐに祭壇のある広間を後にした。
リカルトの持つ羅針盤を頼りに狭い洞窟を進み、怪我があればサンドリナが包帯を巻いた。エドムは理性を狂わせようとする囁きや幻覚を暴き、シャクラの指輪は恐怖の呪詛からチームの精神を守り続けた。
先頭を務めたファウセロは、忍び寄る邪悪な触手や異形に確かな一撃を与え、洞窟の中で安全な道を確保し続けた。

洞窟を進む中、チームは古ぼけた木製の棚がある小さな洞穴を見つけた。崩れそうな机の上には苔むした羊皮紙の束があった。文字をなぞりながら書物を読み解くリカルトの表情が次第に険しくなっていく。

「ここは…神の為の祭壇であり、檻だ…」

リカルトは呟き、読み解いた書物の内容をチームに伝える。

書物にはかつてこの地に封じられた邪悪な神、クティーラについての真実が記されていた。

クティーラは邪神、クトウルフの娘であるため、人類からは邪悪な神として扱われた。彼女は生と死、始まりと終わり、循環を司る女神である。父であるクトウルフが死んだとき、彼を子として産み落とすための胎である。そのため、クトウルフの不死性を保つ存在としてあらゆる邪悪なる神々やその崇拝者から、時間も空間も超えた檻に囚われ続けている。

アルティア洞窟の祭壇は、クティーラを愛した数少ない崇拝者達が彼女に残した遺跡である。崇拝者たちは閉じ込められた彼女を憐れみ、彼女の善性と感情の為にあの祭壇を立てたのだ。

「しかし、今やこの祭壇も見つかり、邪神に冒されている…」

リカルトは口を閉じた。

少女はリカルトの話を聞き終わると、羊皮紙をそっと撫でた。

「なんだかとっても、懐かしくて…温かい気持ちになる」

チームはこの複雑な洞窟に恐れと憐れみを抱きながら羅針盤に従って洞窟を抜けた。襲い来る数々の異形や魔術の数々が、女神クティーラを外に出さないために置かれている罠であり守護者なのだと理解した。いくばくかの時が立った後、淡い光が洞窟の先から見えた。光を反射する氷の光、洞窟の出口である。希望の声が湧き、チームは洞窟の外に出た。

しかし、少女は洞窟を出ることはなかった。暗闇の中に佇む少女は悲しそうな笑顔を称えてシャクラに話した。

「…ここからは、私はいけない」

仲間たちが振り返り、少女を光の中に連れ出そうとする。少女は手を振り払うと、涙をこぼした。

「ここまで来てくれてありがとう。貴方たちをここに導いてしまったのは私の本能。貴方たちをここから助け出したのは私の理性。私はクティーラ。両極端を併せ持つ循環の女神」

サンドリナが驚きに目を見開き、エドムは言葉を失ったように口を動かした。ファウセロは剣を構えかけたが、リカルトが手で制した。少女はそっと、自らの胸に手を当てて言った。

「私はずっとここに囚われていた。自分が何者なのかさえ分からずに…」

彼女の体が洞窟の奥に引き延ばされるように薄れていく。

「貴方たちに出会えてよかった。貴方たちの捧げた勇気が、この姿をくれたの。本当に楽しかった…」

それが少女の最後の言葉だった。彼女は闇に引き込まれ、その姿は跡形もなく消えた。

気づけばあれほど巨大な口を開けていた洞窟の入口は崩れてなくなり、霧は晴れ、全てが夢であったかのように世界は晴れ晴れとしていた。シャクラがチームを率い、探検隊はアルティア洞窟を後にした。

それからの日々、彼らはそれぞれの場所へ戻っていった。サンドリナは研究を続け、癒しをもたらす医師として活動した。エドムは自身の中にある未知への恐れを理解し、冒険の記録を本に記した。リカルトは引退を決意し、知識を求める後進の育成に力を注いだ。ファウセロは護るべきもののため、世界を回る旅に出た。シャクラもまた、生きる意味を新たに刻み、新たな未知を求めて地図を描き続けた。

誰もが、アルティア洞窟の発見の発表を行わず、未完の冒険として胸の中にしまった。

彼らが使った恩寵は、いつの間にか手元から消えていた。

今日も、彼らの夢の中に現れる少女は、名前を呼んでも振り返らず、どこかに向けて手を伸ばし続けている。

La Fino de la Gusto

一味覚の終焉一

世の中には、魂の深奥に刻まれた、本能であるかの如く、味覚へと異様な執着をみせる者が存在する。それは単なる嗜好品の領域を超え、宗教的とも言える渴望のかたちをとる。

この男もまた、そうした呪われた者のひとりであった。彼は幼い頃から、なんの不自由もない裕福な家で育った。欲しいものは与えられ、そうでないものも与えられる。唯一彼にとって不満があったとすれば、変わりばえのしない食卓だろう。一般的な概念からすれば贅沢すぎるその料理の数々は彼の舌を満たすにはいささか以上に面白味のないものであった。両親が揃って車両事故で亡くなったとき、彼は若くして莫大な遺産を手にするようになった。彼はその財力のほとんどすべてを「未だ見ぬ味」への探求に費やした。

始めは珍味と言われる変わった食材から。

韓国のホンオフエ、アイスランドのハカール、フィリピンのバロット、イタリアのカースマルツウ、カンボジアのチャプラなど、珍味と呼ばれる世界中の食材を集めた。

終いには一般的には流通しない、本当に食べられるのか怪しい食材まで手を伸ばした。

盲目の蟹から取れるエラ、凍土に眠る太古の獣の肉、山奥から掘り出された新種のキノコ、密林の奥で採取された木の蜜、果ては人間の臓器など、知人の紹介やオークションで競り落としたものを集めた。

贅沢な料理を日常的に食べてきた彼にとって、珍味を食するという行為は快楽であり儀式であった。まだ見ぬ未知を探し求め、財を惜しまず手に入れ、舌に乗せて味わう。咀嚼する中で今までの常識と正気を打ち碎き、新たな次元を垣間見るような瞬間を味わうまでの全てが、彼の至高の喜びであり生きがいであった。

ある夜、彼の元に一人の商人が訪れた。彼と信念を同じくする特殊な珍味コレクターの紹介でやってきたその商人は、明らかに異常な体つきをしていた。折れ曲がった背骨に犬のような鼻、長い犬歯と裂けた口、ゴムのようにたるんだ皮膚。そして何より、体のほとんどを覆い隠すたわんだ布が、秘密の匂いを漂わせていた。

男は商人の放つ雰囲気気圧されながらも、彼の持ち込む珍味に対する興味を抑えきれず、屋敷に引き入れた。

商人は黒い布を解き、小さな瓶を男に差し出した。中には乾ききった小さな梅のような物が、一粒だけ入っていた。

「これはディディクと申します。コスのとナスの谷の狭間にある、切り立った岩山である我らの土地の、唯一の賢者にしか作れぬ神秘の種です。ひと噛みなされば……分かりますぞ」

商人は瓶を男の前に押しやると、お代は食べてからでよいと断り、観察するか、あるいは見定めるかのように、フードの奥から覗く黒い瞳でじっと男を見つめた。

男は小さな瓶を引き寄せると、瓶の中身をじっと見つめた。彼は珍味の価値は見た目で判断できない事を知っていた。しかし、小さな飴玉ほどのサイズなのに一粒しか入っていないことで、今すぐ食べてしまうことに勿体なさを感じた。しかし、せっかくの知人からの紹介である。味覚を信じて紹介してくれた知人の顔を立てようと、意を決して瓶の蓋を開けた。

見た目通り乾物のようで、香りはほとんどしなかった。次に指でつまんだ。乾燥した粒は弾力を内側に秘めているようで、崩れたり、割れたりすることはなかった。一向に主張しない未知の珍味に、興味と興奮を感じながら、男はそれを舌に乗せた。乾燥してなんの味もしないそれを、男は舌で転がした。

——ひと噛みすれば……分かりますぞ

商人の言葉を思い出し、男は口内のそれを一思いに噛みしめた。そして、男は顔色を変えた。珍味は割れも崩れもしなかった。干した固い肉のような食感で、唾液と混ざり、味だけが染み出してくる。男はにじみ出る旨味に耐えきれず、必死に顎を動かした。

何ともいえぬ海のような香りと塩の味。ほんのりと燻製のような煙の香が広がり、うにのような濃厚な滋味が、唾液と混ざり合って舌にまとわりつき、咽喉へと流れ落ちていく。男はこれほどまでに凝縮された、ねっとりとした旨味が、この世に存在することが信じられなかった。気が付けば男の目じりからは涙が流れ、頬を濡らしていた。咀嚼してから嚥下するまでわずか数分。むしろ長かったであろうその時間、商人は話しかけもせず男が堪能し終えるのを待っていた。

「お聞きするまでもなさそうですがね。いかがでしょうか」

一息ついた男に、いやらしい笑みを浮かべた商人は尋ねてきた。男は溜息をつき、素晴らしい味わいだったことを告げた。そして、用意していた額の三倍を商人に手渡した。次はいつ味わえるか、至極必至の疑問を男が口にする、商人は言った。

「ディディクはその製造方法ゆえ、極めて希少な物です。そうすぐにはご用意できません」

珍味は二度同じものが食べられる事は珍しい。特に希少でオークションや知人の紹介で入手した物ならばなおさらだ。男は苦悶に呻きながらも商人を屋敷から送り出した。

その日から、男の頭の中はディディクでいっぱいになった。男は己の舌先の味覚が求める究極こそがディディクだと確信したのだ。昼は血眼になってオークションを探し回り、夜は夢の中でさえディディクを追い求め続けた。

男の夢は日ごとに変貌し、そしていつしか同じ夢を繰り返し見るようになった。夢の中で月光の届かぬ洞窟へと入って彷徨い歩き、ぬめるせまい石床を這い、骨の散らばるようになった穴へと下りてゆく。男は商人の声に導かれ、洞窟の先からはしゃがれた猫のような鳴き声の饗宴が聞こえてくるのだ。

そうして繰り返すうち、男はついに夢の先を見た。

夢の中に現れた痩せた犬の屍のような生き物は二足で立ち、しわがれた声で男に話しかけた。

「夢を現にしたいのならば、骨と屍の門を越えよ。土の裂け目に沈み込み、舌無き案内人に従え」

男は異様な雰囲気のある夢に飛び起きると、胸を押さえて呼吸をした。とても夢とは思えない現実感を持ったその夢に、ディディクの濃密な味を連想し、舌無き案内人を今か今かと待った。

数日後の夜、男の屋敷に客人が訪れた。以前の商人と同じような見た目をしたその生き物は、横に裂けた大きな口を開き、男に口内を見せた。生き物の口内には舌がなく、男はこの生き物こそが案内人なのだと歓喜した。

案内人は身振りでついてくるよう、男に指示した。男はディディクを求める本能に身を任せ、着の身着のまま屋敷を飛び出してついていった。

案内人は男の屋敷近くにある大きな墓場まで黙々と歩いていった。月に照らされた墓場に薄気味悪さはなく、むしろ一種の芸術的な美しさを漂わせていた。

案内人は墓石の一つを体重をかけて力任せに押し込んだ。こじ開けられた墓石の下の方には地下に続く階段が現れた。地下からはむせかえるような腐敗臭が立ち込め、ゾッとするような冷気が男の足を撫でた。案内人は地下の穴に滑り込むと男を手招きした。

男が慎重に穴に降りると、案内人は頭上の墓石を閉めた。男の視界は暗闇に包まれた。

案内人が手持ちのランプに火を入れると、洞窟の中が男にも見えるようになった。案内人の手元以外は濃い影に阻まれているが、ランプの光が反射し、かすかに見えるのだ。洞窟の中はぬらぬらと光る壁面に覆われており、見たこともない巻いたキノコや動いているように見える苔が壁に張り付いている。案内人は迷路のような洞窟を下へ下へと降りていった。

どれほど歩いたか、もはや男は疲れ果て、案内人についていくのもやっとになった頃、男は自分たちの歩く音以外の音が聞こえるようになった事に気がついた。例えば地面を歩く音、黒板を引っ掻くような音、奇妙な生き物のしわがれた鳴き声である。また、洞窟の中の別の通路には灯が灯っている場所が多くあるようになり、男は目的地に近いことを悟った。

案内人は垂れ幕のかかった洞穴の一つに入っていく、ついてくるよう男を促した。男が恐る恐る布をくぐると、そこには一匹の犬のような生き物がいた。

生き物は二足で立ち、小さなメガネをのせた鼻先を男へ向けると、訝しそうに案内人を見た。案内人は口を開け、男にしたのと同じように舌がないことを見せた。生き物は頷くと、持っていた三角フラスコを台に乗せ、男を見た。

「ようこそ。人間のお客人。我々食屍鬼の棲家へ。私はシュッコブという」

そうして男を伺うように目を細めた。男はなぜシュッコブのもとに案内されたのか分からず、案内人とシュッコブを交互に見た。シュッコブは頷き、案内人に向かって手をふり、部屋から下がらせた。

「さて、お客人。あなたは何を求めてここへ来たのですかな」

男は部屋を見回した。大きな釜に数々のフラスコ、試験管、書類の数々。実験室といえばまずこのような部屋を思い浮かべる事になるだろう光景に洞穴の様子とは異なる文明を感じて男は安心した。そうして見るうち、瓶に入ったディディクを見つけて唾を飲み、それを指差した。シュッコブは男の指先を追い、次に顔を見た。

「ああ、ディディクですか。その様子だと、ディディクを召し上がったようですね。ではこちらもお気に召していただけますかね」

シュッコブはそういって、奥の棚を開けた。冷たい空気が流れ、それが氷室であることがわかった。シュッコブは生ハムのような肉の塊を取り出し、綺麗にスライスして皿にのせた。また、同じ氷室からボトルを取り出してグラスに注ぎ、皿と共に男に差し出した。

「お味が気に入ればもう少しお出ししますがいかがですかね」

男はグラスを取り出して少し口に含んだ。芳醇な血の香りが広がり、後味には独特の臭みと鉄味が残る。味覚を刺激され、男は疲れが吹き飛び、少しの空腹を感じて肉に手を伸ばした。ほんのりとした塩味となめらかな肉の舌触り、冷えた脂が口内の熱で解け、甘さを残していく。とろけるような口どけに、男は恍惚とした表情をしてシュッコブを見た。

「ああ。やはりお口に合いましたか。生のものも用意しといてよかった。普段、我々は腐肉を食べますがね、熟成……というのでしょうか。生もなかなか美味だと気がつきましてな」

シュッコブはまるで人間のように、くつくつと笑った。男はシュッコブが出した追加の肉と血も平らげると、ディディクの製造方法を知りたいと申し出た。男にとってはディディクの安定的な供給を願っていたが、製造方法によって、それが難しいと商人が言っていたことを思い出したのである。製造方法に財力で協力できれば、供給を増やすことができるのではないかと考えたのだ。

男の申し出にシュッコブは眉を顰めた。

「別に製造方法を秘匿しているわけではありませんがね。人間のあなたは見ない方が良いと思いますよ」

シュッコブの遠慮がちな静止は、男には無意味だった。ぜひにと頼み込み、製造中だという過程を見せてもらう事にした。

「いいかな、お客人。あなたの味覚の奥にあるのは想像ではなく理解です。知識とは、知ってしまえばもはや無知には戻れませんぞ」

シュッコブは男の決意が変わらないことに首を振ると、隣の部屋に案内した。

そこは半円状の洞穴だった。中心には石でできた台座があり、その上には仰向けにされた人間がいた。顔には金の面が被せられ、腕と足、胴体までもが拘束され、かすかに上下する胸元からまだ生きていることがわかる。周囲の食屍鬼たちがさまざまな器具を持って何やら準備をしていた。

「今からディディクを作ります。とは言っても、作るのはグルンド液というのですがね。ディディクはグルンド液の副産物なのですよ」

シュッコブの用意した椅子に座り、男は特等席で製造工程を見た。シュッコブは綺麗に剃られた人間の頭を裂き、頭蓋骨を綺麗に切り取って蓋のように開いた。拘束されていながらも人間の体はビクビクと震え、生きたまま苦痛を味わっている。

シュッコブは人間の頭に器具を差し込み、体と繋がったまま、ずるりと脳を引き出した。隣の器具に乗せられた脳は恥じらうように震え、持ち主の口は異様なほどに開かれ声なき悲鳴を上げた。

シュッコブが脳に針のような器具を刺すと、脳から黄金色の液が溢れ出た。シュッコブが針を抜いては刺し、抜いては刺す。人間の体が痙攣し、涙が、涎が、糞尿が垂れる。その繰り返しだった。

脳から流れ出た黄金色の液体は脳の乗せられた器具からこぼれ、下にある器に回収されていく。

液が溢れるうち、脳は小さく縮み、干からびていく。いつしか脳は、梅干しの種のような見た目になった。シュッコブは、脳であったモノと人間の体が繋がっている管や肉をナイフで切り取った。人間は小さな悲鳴を漏らして動かなくなる。シュッコブは意に介した風もなく、種から細かな肉片を丁寧に取り除き、小瓶に入れた。ディディクの完成である。

その光景を男は見ていた。片時も目を逸らさず、凄まじい血の匂いに鼻も覆わず、唾を飲み込むことすらも忘れて。

「どうかな、お客人。これがグルンド液、そしてディディクの製造方法だ」

シュッコブがそうして振り返った時には、男の理性は飛んでいた。人間の肉など、血など、脳など、男にとってはただの珍味だ。しかし、ディディクほどの滋味を持つ料理方法など、こんなにも狂気的な料理方法など考えたこともなかったのだ。なんと素晴らしい技術。なんと素晴らしい調理だろうか。男は狂気を狂気と思わぬまま、身を任せて涙した。

そのまま男は自らの口に手を入れて、口角を引き裂き、歯を剥いた。涎と血が溢れ、眼球がぐるりと回る。血に塗れた手を振るわせ、男は高らかに笑った。

シュッコブは男の様子に呆れたようにため息をついた。

「今夜の宴に、彼の席も用意させよう。人間の世界には戻れまい」

その夜、シュッコブが主催した食屍鬼の宴に、男は望んで参加した。腐肉の筋を噛み、骨をしゃぶるのが異様に美味しく感じた。とろける腐肉を舌が舐めまわし、胃がそれを喜んだ。男は、恐怖という名の調味料が、肉をより旨くするのだと理解したのだ。精密な味覚を満たすには、命を喰らい、心を搾り取る技が必要なのだと。

果たして、それは味覚の進化だったのか、正気の崩壊による狂氣的な洞察力だったのか。

朝になった時、彼の身体はもはや人間と呼べるものではなかった。背骨は曲がり、皮膚はゴムのように弛み、指先は異様に伸びていた。鼻と口は犬のように高くなり、瞳孔は上下に揺れ、裂けた口の端から唾液が漏れる。彼は名もなき食屍鬼となり、シュッコブの崇拜者となった。

ディディクの味を知った者が、二度と戻れぬのは、それが生き物としての正気を失わせ、狂わせるからなのだ。

深き地の底で、今日もまた、新たな珍味が練り上げられる。
かつて人であった一人の男が、ただ「味わいたい」と願ったがゆえに。

権利表記

- ◆本作は、「著：クリス・ウィリアムズ、サンディ・ピーターセン他／訳：坂本雅之／株式会社KADOKAWA」が権利を有する『クトゥルフ神話TRPG、ラヴクラフトの幻夢鏡』の二次創作作品です。
- ◆本作は「クトゥルフ神話TRPG基本ルールブック6.0/7.0」、「マレウスモンスターロルム」なども参照しています。
- ◆本シナリオには公式設定とは別の独自解釈が含まれます。
- ◆本作はフィクションです。実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。
- ◆閲覧環境により、表示やレイアウトが異なる場合があります。
- ◆誤字脱字等を修正した更新版をアップロードする場合があります。
- ◆本作および付属する表紙・画像・テキスト等に関する著作権は、カラムエリア幻灯店／如月つばきに帰属します。
- ◆無断での転載、複製、再配布、改変、アップロード、AI学習への利用は禁止します。

クレジット

- ◆表紙：みやした様 (@ymlovekw)
- ◆作品内使用素材：マール社様

読者の皆様へ

作品内に誤字・脱字等ありましたら下記のお問い合わせフォームから詳細をお送りください。また、ご感想もいただけますと大変励みになります。
<https://sites.google.com/view/atelier-cramellia-lumira/ホーム>